有島武郎研究

――著作集第十二輯『旅する心』を読む――

宮野光男

有島武郎著作集第十二輯『旅する心』は、大正九年十一月十八日、叢文閣から刊行された。この輯の完成までには複雑な経緯があるが、事柄としての詳細については、筑摩書房版全集第六巻の解題[1]、江頭太助氏の「有島武郎と『フランチェスコ伝』（四）――『アッシジの秋』を復元する意味」[2]によって見るのが、確実な方法ではないかと思われるので、詳述はしないが、このような形で刊行したいきさつについて、自らが書後において、著作集第十一輯として刊行した『惜みなく愛は奪ふ』についての反響に触れたあとで、それが有島にとっては、〈偶像破壊の運動であつた〉ことを、つまり、〈価値判断の標準の変更であつた〉ことを述べたあとでつぎのように述べている。

「運命の訴」といふ創作の予告をしておいた通り、私はこの夏材料を集めたり、考へをまとめたりした上で執筆にかゝりました。而して百頁ほど書き上げたのでした。所がどうしても気に入りません。（中略）私は全く失望して執筆を廃してしまひました。それから私は力が抜けてしまひました。過去の仕事までが全く無価値に思はれて来ました。（中略）今度といふ今度ほど迷ひこんでしまつたことはありません。私は暫らくだまつてゐたいと思ひます。何時この落潮が恢復するかは自分でも知ることが出来ないのです。それでもその申訳といふのではないが、已むを得ず旧稿「旅する心」を出版して貰ふことにしました。せめては伊太利の旅行記を完成してから発表したかつたのですけれども、今はその気力さへなくなつてゐます。〔以下略〕〔一九二〇、十月十日〕

これは、有島の内面にあっては、一方において、創作上の深刻な行き詰まりの状況に陥っていたと同時に、なればこそ、その打開のためにも、新しい可能性を求めて、模索しなくしてはならない状況であったことを知る手掛かりであり、この作品の読みに関する重要なポイントのひとつとして位置づけなくてはならなところであろう。

この輯は、有島のそのような根源的な内的要請を受けたものであり、その可能性をどのようなかたちで表現しているのかを問うことが、ひとつの課題なのである。

この問題解決の方法として、このところまで続けてきている、著作集に付けられているホイットマン詩によるエピグラフとの関連において読むということが、どれほど有効であるかということが問題になるところであるが、まずエピグラフとして掲げられているホイットマン詩「語られぬ望み」解釈から、論を進めてみたいと思う。

*

著作集第十二輯『旅する心』に付けられているエピグラフは、ホイットマン詩「語られぬ望み」の全文である。[3]

生と陸地によって語られず、ついに満たされぬ望みを、／さあ海をゆく者よ探し求め見出さんとて走り進め。

なお、この詩の有島訳はないので、岩波文庫版の訳[4]によった。

さて、このホイットマン詩には、どのような解釈が可能なのであろう。

ホイットマンにとって、〈海〉が何を意味しているのか、まず、この問題から考えてみよう。

このことについては、清水春雄氏の『ホイットマンの心象研究』[5]に、詳細な論述があり、参考になる。

このところで氏は、ホイットマンの創作意図には特別に海に関する叙述はないもの、、詩集『草の葉』(Centenary edition)[6]には、全詩三九六篇のうち、タイトルに海の意を含むものが二九篇、海のイメージを表す語を一語でも含む詩篇は一二九篇もあり、〈その他vessel, steamer, voyager 等々、海ならびに海にゆかりの語の総数は約一一六〇に及ぶ〉という。そして、それらの詩篇を内容的に分類すると、まず、〈自然の海〉という具体的に自然の景物として歌われたものがあること、それが、場所としての、自然の一部である海から、自然の一部である海の力を意味するものまで多様であるが、たとえば、〈「揺り籃の歌」〉に見られる〈海のささやき〉によって教えられる〈死の悟りから自分の歌が生まれ〉たことを言い表し、ホイットマンが、海のもっている〈神秘性〉、〈宇宙の種々相、大いなる苦悩、大いなる和らぎ〉、つまり〈海こそ宇宙の根源的な熱情〉、あるいは〈永遠の誕生のリズムが織り出〉すところの〈暗示〉を、具体的な海のイメージのもっている〈多様性〉から受けていたことを明らかにしている。

さらに、ホイットマンの海のもう一つの特色を、〈比喩の海〉としてとらえ、ホイットマン詩における海のイメージが、その象徴性において結局のところ永遠性の表現であり、海への志向がその可能性追究の顕現であることを詳細に実証したものであるが、そのなかで、有島によって取り上げられている「語られぬ望み」についてはその〈海〉が、〈彼〔ホイットマン〕の超絶主義的宗教哲学の立場から見ての、究極者であり宇宙に偏在する〉〈魂の航海する場〉を表しており、しかもそれは、〈一つは魂が肉体に囚われている間で、つまり生の海、二は肉体を離れた場合、すなわち死の海、三は生と死の双方に連なる場合〉を表すところの海のうち、〈死の海〉を表現するものだとしているところに、その読みの特色がある。つまり、ホイットマンにあっては、〈死〉とは〈消滅や絶滅の意ではなく、

あくまでも生への復活を予想する生命の海で〉あることは言うまでもないことである、というのが、氏のホイットマンにおける〈死〉論の本質であり、「語られぬ望み」が、〈地上で得られぬ魂の究明に、船出することを喜び、陸地を離れてこそ真のいのちが開かれると、死において肉体の束縛を逃れた新生を寿いでいる〉詩のひとつであることを明らかにしているのである。

つまり、この詩は、地上では実現することの出来ない魂の渇望を、海での可能性に求めて船出することを慫慂するところにその本意を読み取ることができるということになるのであろうか。

この詩に対する直接的な解釈ではないが、「語られぬ望み」を踏まえたホイットマンの死の想念に関する解釈としては、岡田愛子氏の論がある。

氏は、「有島武郎とウオルト・ホイットマン――その邂逅・有島に於けるホイットマンの変遷――」[7]において、この詩が、リンカーン大統領追悼詩における死の讃歌を踏まえつゝ、〈死を救主・慰安者として歌った詩は、有島に死こそが源への帰還なのだということを感じさせた〉ものであることを、そして有島の精神構造が〈現実生活の中には行きつくものはないのだと。そして彼は神を錯視することによって今すぐ満たされようとしてあがく事の無理と無意味とを感じた。そういう彼には神は信じる必要と理由はもうなかった〉状況にあるものとして捉え、「揺り動きやまぬ揺籃から」における〈愛と死のうた〉、〈ふたり一緒に飛んで来た幸福な鳥。そして突然雌鳥を見失ってしまった時の雄鳥の悲しみ。そして失われた伴侶を永久に呼び求めさまよう鳥〉の歌について、〈鳥のうたはその untold want があるのが人間の存在の本源的な悲しみなのであり、それを背負って生きてゆくのだということを暗示した〉というのである。もち論、氏はこのところで〈有島は其後、自分の存在を untold want を探しつつある状態でとらえてゆく。そしてその有島の変化にともなってホイットマンもまた、彼の中で変貌してゆくのである〉と述べ、有島の内面にある、たゆまざる、誠実な追求姿勢についてふれているが、最後のホイットマン論「ワルト・ホイットマン」が、〈現実に求めながら現実に求めることを敢えて意識的に避けた孤独な人間像がとらえられている。海を開拓しはせめぐる者の姿は、突如として、決して満たされぬ愛を胸に秘めて歩く傷ついた旅人の姿になった〉ものであるという意味で、その本質が〈伝統的にとらえられた、ホイットマンの定命の死を語っているものであるとしているのである。

有島が、いわゆる肉体の死、定命の死として、ホイットマン詩における〈死〉を考えていたかどうかは疑問であることは、〈死の意味は、今や他の何よりも大きな意味を持つている。ホイットマンが歌っている以上の何かがある〉〔日記　大五、六、二十五　原文英文〕、〈兎に角「死の力の大きさと崇高さ」とをしみ〴〵感じます。ホキットマンの「死の頌歌」にもうたひ尽してないと思ふ美しさを感じます〉〔原久米太郎宛書簡　同、同、二十六〕と述べているところからも考えられなくてはならないことである。すなわち、このところには、一方では死の単純な讃美を越えるとともに、否定性つまり、〈絶望〉、〈恐怖〉などをも越えた可能性追求の姿勢をみることがで

きるように思われるのである。

すでにホイットマン論で述べた[8]ことではあるが、有島には、たとえば、

私は私が出来得る限り仔細に私の魂を調べて見た。而して靡爛した魂はそのまま健全な極にある事を知つた。去年の枝を切り払はれて春風に雀躍りする若木のやうに、私の魂も傷々しい疵のなかにあつて歓呼の声を擧げてゐる。私は甫めて生の喜びの如何なるものであるかを知つた。生とは押しなべての人の言ひ草のやうに死の対照ではない。生の大きな海原から逃れ出得る如何なる泡沫があり得よう。死――死も亦生に貢する一つの流れに過ぎないのだ。劫初から劫末に、人の耳にはあまりに高い音楽を奏でつゝ、滔々と流れ漂ふ生の海原は、今の私の眼の前にほの〴〵と明け亙る。凡ての魂はこの海原に聳え立つ五百重の波である。その美しさと勇ましさとを見ないか。この晴れやかな光に照らされると、死も亦美しい一人の保護女神だ。死を讃美しよう。〔「草の葉」大七、四、初出大二、七〕

という死論があったことは周知のことである。ある意味では単純な、直接的な、否定を経ていない死論だと批判されてしまうところの死論である。それに対して、先に記した日記、原宛書簡に見られる死論は、死の単純讃美から脱しようとしているという意味で、死に対する認識の変化を志向するものであり、単純な死への回帰願望ではあるまい。それがいったい何であるのか判らないところに有島の思いの深さ、願いの切実さを見なくてはならないのであろう。

死における可能性について、ホイットマンが意図したものを踏まえながら、さらにそれ以上のものを、というときに、これらの表現を越えてさらにもうひとつの可能性を求めるとするならば、それは〈死〉における神秘的永遠性発見の試みということになるのではないだろうか。

死が生の前提として位置づけられる可能性は、人間存在にあっては本質的に矛盾であることは言うまでもない。死は一切の条件であることを拒否するという意味で、絶対的な否定だからである。それにもかかわらず、死を生命の前提としなくてはならない心的状況であるというところに、有島の生命認識における限界状況を思わざるを得ないのである。そして、この問いに対する応えの可能性が復活にしかないという意味で、神秘的であり、宗教的発想ですらあると言わざるを得ないのであるが、ホイットマン詩における〈死〉が、復活願望の前提であるという清水氏の指摘は、復活の本質が何であるかを十分に考察しなくてはならないにしても、このホイットマン詩を有島が著作集のエピグラフとして選んでいるというところに、有島の当時の精神状況を考えるひとつの重要な手がかりを見ることができるのではないかという意味で、大変示唆に富んでいるように思われるのである。

エピグラフ論とは別に、有島の海への関心を問題としてものとしては、戯曲「老船長の幻覚」〔明43・7〕[9]や「或る女」がホイットマンの影響下にある作品として論じられており、なかでも、「或る女」における〈海〉についての山田説、福田説[10]など、有島が〈海〉に永

遠の生命の可能性をみようとしていたことを指摘したものであるが、葉子の限界状況を〈海から陸へ〉という興味深い発想で捉えようとした江種説もある。[11]

「或る女」の葉子の限界状況認識が、一種の畏れとしての〈深淵転落感〉ともいうべきものであり、それが、未完の長編「運命の訴へ」においてさらに顕著となり、有島の精神構造の内奥にあって、つねにその片鱗を垣間みなくてはならないものであったことは、すでに述べたところであるが、[12]それは、本質としての限界状況認識のひとつの表現ともいうべきものであることはいうまでもないことなのである。

＊　＊　＊

〈海〉が永遠の象徴であったように〈語られぬ望み〉が、その本質において〈現実に彼を満たすものとしての神〉（岡田）ではなく、より根源的な神秘的にして不可解な存在追求の象徴的表現として捉えることのできる可能性を考えてみなくてはならないところである。

それは〈語られぬ望み〉と表現されているもの、内実が、有島の内面性と、いかに響き合っているか、という問題でもある。

〈この世において、陸地において、語られずまた与えられなかった欲求〉〔清水春雄訳、前掲書〕、つまり有島の、それまでの生において、〈語られず〉、したがって〈与えられなかった〉望みとは何か、という問題を考えようとするときに、想起することのできるのは、著作集第七輯『小さき者へ』のエピグラフ詩「回転する地球の歌」（三）の〈最上の言葉を語るよりさらに良いことが私には分る、／それはいつでも最上の言葉を語らずにおくこと〉と、それに関連した詩として取り上げたホイットマン詩「表現されぬもの」である。

いったいどんなふうに言えばいい、／一切の周期も、詩も、歌びとも、芝居もすんで、／誇りとされるイオニヤの、インドのそれも、――ホメロスも、シェイクスピアも――長い、長い時間のぎっしりと無数の点で埋まった道も、地域も、／輝いている星群と星たちの作る天の川――「自然」のさまざまな脈搏の刈り入れもすみ、／過去を想うすべての情熱、英雄、戦争、恋愛、崇拝、／究極の深みにまで投げこまれたすべての時代の測鉛、／人間のすべての生活、咽喉、願い、脳髄――すべての経験の表現もすみ、／長いものであれ短いものであれ、すべての言語、すべての国に数知れぬ歌が生まれ出たあとも、／なおも何かが、詩歌の声でも活字でもまだ語られていない――何かが欠け、／（たぶん最上のものがまだ表現されず、欠けており）〔岩波文庫版〕

とくに、その後半部分に表現されている、表現不可能なもの、存在に対する、一方から言えば、言葉の不完全性へのもどかしさの表明と同時に、その存在への、遙かなる畏怖の念の表明とが混在していることの問題も、すでに指摘した[13]ことではあるが、このところにおいて、ふたたび有島の課題としてクローズアップされていることは興味深いことなのである。

ことほど左様に、〈語られぬ望み〉によって暗示されている表現

不可能なものに、表現を与えたいという思い、その実態の把握と、それとの関係の回復への願いは、有島の根源的希求として、位置づけられていたということになろう。それを可能にするものが、著作集第十五輯『芸術と生活』のエピグラフ詩「未来の詩人たちよ」に示されている〈詩人〉であることを有島が予見しながら述べているのにちがいないことは、有島の詩人に対するオマージュのなかに、すでに、顕わであることは、「惜みなく愛は奪ふ」論において詳述したことである。[14] また、著作集第十五輯『芸術と生活』論からアプローチした「宣言一つ」論[15]において指摘したように、ホイットマンの、彼自身の不完全性への思いは、有島にとっても我ひとともに可能性追求者としての認識に対する共感と同情をみることのできる共通認識であったにちがいない。そのことは、「『ホイットマン詩集』第一輯広告文」〔「読売新聞」大十・十一〕、

彼れは恐らく完成者ではない。然し彼れは確かに創始者だ。健全な胚子、自由な泉源、それは彼れだ。彼れを識り、彼れを味へ……訳者。

あるいは、「「草の葉」は彼れが唯一の自由像」〔大十一、二一、二六〕における、〈詩人としての彼の価値は容易に定め難い。何故ならば、彼は死ぬまで未完成品で終った感があるからである〉、からも明らかなのである。

そのような未完成品としての認識ゆえに、「成熟した詩人が現れたとき」に示されているように、有島の成熟のときへの願望は、強烈だったのではないか。この詩への言及は、有島にはないが、有島が、詩人への憧憬を語るときに、このホイットマンへの同情と共感とがあったにちがいないということを、エピグラフ詩「語られぬ望み」はみごとに表しているように思われるのである。

表現論としての表現不可能性、それは有島の表現が、魂の表現である、という意味で、現実認識における魂の不毛性の謂でもあろう。〈生と陸地によって語られ〉ないものとは、換言すれば、このところに至るまでの有島の全生涯、全存在に対する否定の表現でもある。直接的には、有島の海への〈航海〉に賭けた期待が何であったかを知ることのできる望みであるということができるが、この紀行文のポイントは、その望みの表明であることを読み取ることが必要なのである。要約すれば、それは結局何を求めてのことなのか、エピグラフに見られる、永遠の生命の可能性への期待が、以後の作品においてどのように有島の言葉によって表現される可能性があるのか、ということが、問題となるところなのである。

＊　＊　＊

ホイットマン詩における〈死〉が、復活の前提であるという指摘は、有島の当時の精神状況を考えるひとつの重要な手がかりになるのではないか、という意味で、大変示唆に富んでいるように思われる、と述べた。それは、「旅する心」の序章にあたる部分に、有島の旅に託した死の想いが、次のように綴られていること、無関係のことではないはずのものだからである。

旅装をと、のへるにつけて思ふことは心の旅だ。家を離れ、友と別れて人は旅行くやうに、心も何時かは一度、習慣を離れ、愛着と別れて独り淋しい旅に上がらねばならぬ。……死……。旅装をと、のへるにつけても思ふことは心の旅だ。

この時期の有島の思いのなかにある死が何を意味しているかを考えるときに、ともすれば破滅的な、すぐさまその悲惨な結末と直接的に結び付けたくなってしまうのも、先に見た書後からだけでなく、一連の否定的ニュアンスを読みとることのできる晩年の諸エッセイなど、あるいは「泉」所載の諸短篇、あるいは『ホイットマン詩集』第二輯に収められている詩篇がすべて死をイメージしたものであるとの指摘（岡田）がそのひとつの表れであろうし、これもまた晩年の詩篇「瞳なき眼」〔大一二・三～五〕に集められている八篇の詩に、表題作をも含めて、すべて〈死〉のイメージが表現されているように思われることからも当然のことである。

しかし、このエピグラフとして掲げられた詩がそうであるように、ホイットマンの、死に対する共感と同情、さらにそれを越えたもう一つの可能性への期待というものは、死の神秘性の解明、たとえば、〈この万象に尊厳を認め生死の変遷をもこめて、一切の現象に内在する魂の永遠性に対する強い信仰は、彼の楽天的な宗教観を形づくっている。つまり彼にとっては個人の死は、全宇宙のいのちという絶対的な立場から見るならば、それは死滅ではなく、永遠にのびゆくいのちの一過程である。死は全体の成長と見て、死もまたいのちの一位相であると見ているのである。このような、いずれかといえば東洋的な生命観――小我死と大我の成長との関係に見るごとき考え方――は、インド哲学に理解の深かったエマソンの影響を多分に受けているためであるとも考えられている〉（清水春雄、前掲書）、つまり、〈生死一如〉の観点が、〈永遠の海〉、〈神秘の海〉への憧憬として表現されている詩への共感というかたちで示されているということは、同時に復活への、はるかなる期待をも考えることができるという意味で、有島のこの時期における神秘的なものへの志向性と、そのなかに新しい可能性を見ようとしている者であることの解明の、一つの有力な手がかりとなるように思われるところなのである。

＊　＊　＊

江頭太助氏の「有島武郎と『フランチェスコ伝』（四）――『アッシジの秋』を復元する意味――」は、日記、書簡と紀行文との比較論としても興味深い。とくに著作集『旅する心』に補筆収録された大正六年八月、「時事新報」紙上に六回にわたって掲載された紀行文と、その素材である有島武郎日記との詳細な比較――〈①素材の肉付け　②感想の大幅な書き込み　③ある部分の素材（または語句）の削除、などの操作がなされている他に、④移動のない部分〉に分類して、まず〈図式化し〉その特色を述べ、とくに②の〈感想の大幅な書き込み〉部分を中心とした詳細な検討――は、大正六年という時点における、あるいはまた、これが、著作集『旅する心』に、一部改訂されてはいるもの、――本質的にはそのまゝ採録されているという意味で、大正九年時の有島の心的状況を知る資料でもある

ということになるのである。

この論は、江頭氏の論題が示しているように、有島のアッシジ体験が、彼の精神史上いかなる位置をしめているかを検証することが、その中心であることは当然のことであるが、〈「アッシジの秋」はフランチェスコを合わせ鐘とした有島の自画像〉であり、〈サバティエの『アッシジの聖フランチェスコ』が、『聖フランシスの小さき花』や、「ルナンの"Life of Jesus"」の触媒作用によって有島の自我を深く切り開く契機を作り、それが大正六年の開花期を招来する一要因となった〉という指摘は、有島の愛についての本質的な認識考察のための有力な手がかりを与えるものということができよう。そして、「アッシジの秋」の結語であり、そのことは同時に著作集『旅する心』の結語でもあるのだが、〈私達はあまりに当面の生活を肯定する事に慣れ過ぎてゐる。視角をかへて物を見直す余裕を持つてゐない〉ことをかこち、フランシスが、〈独断を個性に代へ、理性の武具に直感の強みを与へ、社会生活に根本的な一つの解釈を寄与して歴史の進運に大きな一転歩を促した事〉を評価し、有島にとって、このアッシジ訪問が、〈私達の生涯がこの古跡訪問の一事によつて変化に出会ふ事が何時かは必ずあるだらうに〉、と期待していることを取り上げているのであるが、そこまでの生活がそうであったように、それ以後の生活もまたそうであることへの、つまり有島の生き方が、その本質において変化志向であったことを表現したものとして、傾聴に値するものだということができよう。エピグラフ詩から読みとることのできる有島の新しい可能性追求の姿勢は、その意味で首尾一貫しているということになるのである。

有島にとって、フランシスの生き方が、早くから一種の理想であったことは、諸家の認めるところである。サン・フランシスコ寺院の上下二院からなる伽藍を、〈聖者の心の不思議な象徴〉、すなわち〈その心の一隅には年少の時代の放乱な生活をそのまゝ、奇跡のやうに浄化した深刻な懺悔のうめき声、他の一隅には野の百合の如く、あからさまな、こだはりのない、正しい愛の貧欲だ〉、とみる有島にとって、フランシスは、宗教的存在であると同時に、可及的理想像として――つまり、ローファーの一顕現として――位置づけられていたように思われる。

クララとの関係が、人間にあって回復することのできた愛の関係の一顕現であることも、有島の愛の論理の完成像を垣間見せるものであろうし、なればこそ、ローファーの一人であるキリストの面影をフランシスのなかにみることによって、〈この小さな地点から基督滅後最も基督に近い愛の泉が滾々として湧き出したのだ〉と述懐することができたのである。フランシス、クララ、あるいは彼らの関係のなかに見ることのできた〈美しい印象〉が、すばらしいものであればあるほど、有島の精神構造の内実は、空虚でみじめなものであったにちがいない。なぜならば、絶望のないところに、真の憧憬などあるはずはないからである。

〈人間の生命の一番怖れるもの……帰無……滅却……をこの首は恐るべき力を以て暗示してゐるのだ〉、とは、直接的には、〈ルトヴィチのメデュサ〉を目のあたりにしたおりの有島の感想であるが、おそらくこの思いは有島の内部にあって大きな位置を占めていたものにちがいない。「瞳なき眼」の詩篇のひとつ、「恐怖の面紗」は、そ

の形象されたものであろう。

この紀行文のなかにあって、具体的な事柄、状況、関係に対する直接的表現は、おそらくそれらのものを越えて、有島の大正九年という時点での内面性の表白を負わされていたにちがいない。

いま、それを具体的に詳述する紙幅はないが、米国生活を、〈孤独な三年〉といい、〈この地上に繋ぐ因縁の微弱さを……而して自然の窮りなき豊満と多様とを……。心がひとりでに叫び出したくなるやうなつかしみを感じながら、言葉もかけず、挨拶もかはさず、ただ一眼見合はしたばかりで、永遠に視界から離れ去つてしまふ人。その人は一体何の為めに私の前に現はれ、何の為めに私から離れてしまふのだらう〉、と思わなくてはならなかった有島であり、都市は、文明は、〈滅び〉、〈そのあとに残るものは何だ〉と、疑わなくてはならなかったのである。あるいは、旅行者であることからくる〈異邦人〉としての思いは、人間存在それ自体への思いであろうし、ハーキュリスの石像に、〈淋しさ〉をみなくてはならなかったのも、その故であろう。ファニーですら、今や思い出のなかにあっては〈淋しい子〉となっていることもまた、その一例である。

そして、一行、前後に何の説明もなく、ため息のようにしてもらされている、

来る所を知り行く所を知るものゝ心は哀しきかな。秋の雲はかくて我等の眼に哀しきなり。

こそ、有島の限界状況認識を、いっさいの虚無と絶望とを判ってしまった人間であることの認識を表現したものではないだろうか。

ここには、すでに可能性をもくろんだ保留はない。保留の可能性のない人生は、失われた人生であろう。このところは、その悲哀が語られているところなのである。

クララに触発された、〈一向の熱意に輝く美しい眼の少女〉の出現への期待が、有島にとっての新らしい可能性への思いの表出であるようにも思われるのであるが、なればこそ、有島は、なお、変化の可能性を志向せざるをえなかったのである。

*

かつて、有島の生活史にあって、明治三十九年八月三十日から明治四十一年六月十九日までの約二年間の時期を〈変化してゆく過程の時期として位置づけることのできる二年間〉としてとらえたことがある。[16]

ここで言うところの二年間とは、有島の留学を終えた帰国の途路、弟壬生馬とともにしたヨーロッパ遍歴から、母校札幌農学校〔当時すでに東北帝国大学農科大学に昇格していた〕教師としての生活から作家としての生活へと変化してゆく過程として、あるいは、キリスト者としての生活から離教者としての生活へと変化してゆく過程の時期として位置づけることのできる二年間のことである。つまり、有島にとっては、この時期においても、変化志向をその本質としていたことを明らかにしたものであるが、思うに、いま、そのことが、大正九年という時点においても、このようなかたちで、直接的に具体的に再確認されているということであり、有島にとってそれは、

全生涯を通じてなされた、資質であると同時に、生き方の問題として、意識的に求め続けられた志向性だったということができるように思われるのである。

これまでの有島の精神史を跡づける作業が、そのことを実証してきたことにもなり、今は繰り返しになるので再述はしないが、しかし、このところで、その基本的な姿勢が、著作集『旅する心』においても主調音として聴こえてくることを指摘することができることを、新しい可能性を求めて出航することを慫慂しているこの輯のエピグラフは、みごとに表現しているということができることを確認しておきたいと思うのである。[17]

註

(1)『有島武郎全集』第六巻〔筑摩書房刊　昭五六・二〕

(2)「北九州大学文学部紀要」第三十号〔一九八三・一〕

(3) この集のエピグラフについてのエピソードは、全集解題でもふれられているが、佐々木靖章氏の「『旅する心』（有島武郎著作集第十二輯）の献辞」〔「書宴」一六　昭五九・二〕に献辞の問題と併せて詳細に紹介されている。

(4) 鍋島能弘、酒本雅之訳　岩波文庫版『草の葉』〔昭四六・七〕

(5) 篠崎書林刊〔昭四三・十一　訂正版〕

(6)『草の葉』第六版と『二つの小川』二巻からなる『百年祭記念版』のこと。一八七六年刊行された。

(7)「国語と国文学」〔昭三六・十〕

(8)「有島武郎研究――「詩への逸脱」をめぐって（四）――」〔昭五三・十一〕

(9)「有島武郎研究――著作集第七輯『小さき者へ』をめぐって――」〔昭五九・十一〕　なお、この問題に関しては、吉田俊彦「『老船長の幻覚』論――悲劇性の原拠――」〔「岡山県立短期大学研究紀要」第二五号　昭五六〕がある。

(10) 山田昭夫「『或る女』鑑賞」〔『鑑賞現代日本文学⑩　有島武郎』〔角川書店　昭五八・七〕　福田準之輔「日本文芸論集」

(11)「『或る女』後編の構想（一）」〔昭五二・三〕

江種満子「『或る女』後編ノート」〔『有島武郎論』昭五九・十　桜楓社刊〕

(12)「盲目状況認識をめぐって」〔「表現と構想」昭五十・十〕

(13) 註8に同じ。

(14)「有島武郎研究――著作集第十一輯「惜みなく愛は奪ふ」を読む（一）――」〔梅光女学院大学「日本文学研究」第二四号　昭六三・十一〕

(15)「『宣言一つ』試論」〔「国文学解釈と鑑賞」平元・二〕

(16)「有島武郎の日記――第十一巻解説――」〔『有島武郎全集』第十一巻　月報11　昭五七・七　筑摩書房刊〕

(17)『有島武郎の文学』〔昭四九・六　桜楓社刊〕、「有島武郎研究――「詩への逸脱」をめぐって（一）――」～「有島武郎著作集第十一輯『惜みなく愛は奪ふ』を読む（四）」〔昭五十・十一～平二・十一　梅光女学院大学「日本文学研究」第十一号～第二六号〕